

まるで「ブルボン王朝」

隠岐さや香名古屋大学大学院 経済学研究科教授



日本学術会議の会員候補を菅義偉首相が任命拒否したと知ったとき、近世フランスの「ブルボン王朝」みたいなことが起きたと思いました。研究している18世紀の王制時代のフランスのアカデミーを思い出しました。

露骨な政治介入

当時のフランス・パリの科学アカデミーは、科学者の自律性を尊重した組織だったと言われています。科学の才能のある人を探すため、会員候補は科学アカデミーの選挙で選ばれていました。しかし、選挙で選ばれた複数の候補の中から一人を選ぶのは王様でした。一

方で、著名な数学者のコンドルセは「アカデミーの会員は王が選ぶべきではない」と書き残しています。絶対王制の時代の数学者でさえ、学問の基準で選ばれたものに、違う方法で介入するのは「学問を否定する行い」と捉えていました。

現代の日本で、権力が介入するプロセスはあってはいけなと理解していたので、菅首相の任命拒否は何かの間違いじゃないかと思いました。こんなに露骨に政治家が介入するとは思いませんでした。

今回のことで、特定分野の学問への攻撃が広がり、その学術分野の発展が阻害されることを危惧します。この間も自民党の杉田水脈衆院議員によるジェンダーやフェミニズム研究へのバッシングなど特定分野への攻撃が行われてきましたが、それがさらに広がる危険性があります。また、攻撃の対象になっていない研究者にも萎縮が広がり、環境や感染症対策などの問題でも研究者が政権にものを言いにくくなるのではないのでしょうか。

議論のすり替え

2015年に学術会議の改革を議論する政府の有識者会議の委員を務めました。今、任命拒否の理由の説明もないまま、自民党は学術会議の改革を主張していますが、ひどい議論のすり替えです。自民党案は独立行政法人化などを提言しましたが、有識者会議で、そうした議論が出た覚えはありません。当時、学術会議は若手研究者を増やすなどの改革をしており、この方向で改革を進めるよう報告をまとめました。こうした議論を無視したことがやられています。

自民党案を見ると、学術研究者をまとめ、政権と密に話し合ってくれる組織がほしいという欲望を隠さずに書いています。

任命拒否が起きた後、強い批判の声が上がりました。多くの学会が声明を出し国際的な問題にもなりました。こうした抵抗が政権に効いていることは間違いありません。世論を広げて任命拒否の理由の説明を求め、議論を迫っていくことが必要です。聞き手・伊藤 幸

おき・さやか 1975年生まれ。専門は科学技術史。著書は『科学アカデミーと「有用な科学」』『文系と理系はなぜ分かれたのか』など。日本学術会議連携会員（2014年～）。日本学術会議の新たな展望を考える有識者会議委員（14～15年）。

しんぶん赤旗 電子版 2021年1月5日【1面